

石川県における令和2年度スモン患者の現状

菊地 修一（石川県健康福祉部）
大川 義弘（城北クリニック）
相川 広一（石川県健康福祉部）
酒井 徳子（石川県健康福祉部）
堺 知里（石川県健康福祉部）
丸山 翔（石川県健康福祉部）
殿城 典子（金沢市）
山田 実佳（金沢市）

研究要旨

本年度のスモン検診対象者3名（全員女性）について、10年前の平成22年度から本年度までの経過をたどった。

スモン患者3名の状況は、本年度の調査時点において、2名が在宅で療養中、1名がショートステイを利用中であり、年齢は71～84歳、発症年齢は20～32歳、発症後の経過年数は51～52年である。

10年間の経過の中で、身体状況や本人を取り巻く環境に変化がなかった1名は10年前の状況を維持し、変化があった2名については、身体的・精神的に状況が悪化している現況がみられた。

A. 研究目的

スモン患者について、現状を把握するとともに、過去10年間の経過をたどり、現状に至った影響を明らかにする。

B. 研究方法

本年度のスモン検診対象者について、検診結果及び保健師によるADLおよび介護に関する現状調査のききとり結果の現状を確認し、過去のスモン現状調査個人票により10年間の経過をまとめる。

（倫理面への配慮）

受診者本人（家族）から受診時にデータ解析・発表について口頭で同意を得たうえで、データを匿名化し、個人を特定できないようにした。

C. 研究結果

1. スモン患者数の推移

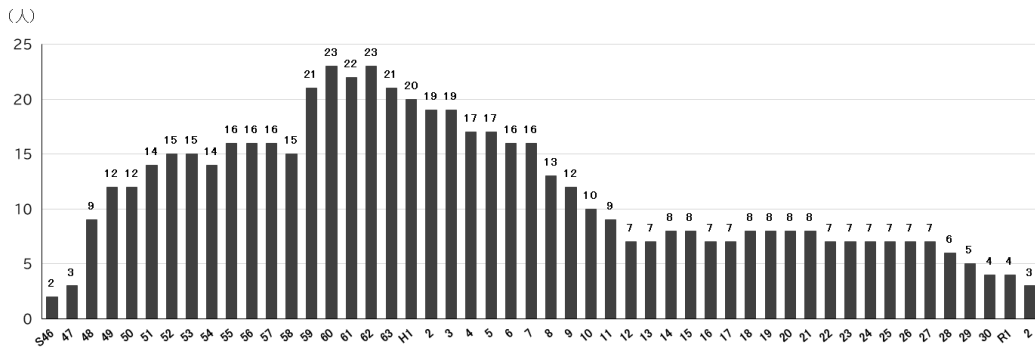
スモン患者数（特定疾患研究事業医療券交付数）は、昭和60年代の23名をピークに減少し、直近10年間では、4名が亡くなり、1名が県外へ転出し、本年度は3名となっている。

2. 10年間の経過

A氏、84歳女性、在宅療養中

本年度の検診等は、例年通り、医療機関で検診を受診し、ききとり調査を実施している。

- (1) 歩行：「一本杖」で維持している。
- (2) 異常知覚の程度：「中等度」で維持している。
- (3) 身体的併発症：「白内障」、「高血圧」に、平成29年度に「緑内障」が加わった。また、平成27～30年度に「右肩関節痛」があった。



スモン患者数 (特定疾患研究事業医療券交付数) の推移

(4) 精神症候：ほぼ「なし」で経過しているが、右肩関節痛があった同時期の平成 28～30 年度に「あり（「心氣的」又は「不安・焦燥」）」の記載があった。

(5) 診察時の障害度：「中等度」で維持している。

(6) ADL 及び介護の状況

1 日の生活：「ほとんど毎日外出」で維持していたが、平成 29 年度から「時々外出」となった。

日常生活動作：自立 (Barthel インデックス 100 点) を維持している。

生活内容：手段的自立 (5 点満点)、知的能動性 (4 点満点)、社会的役割 (4 点満点) で 3 区分し、点数化することで経過をみた。A 氏は手段的自立、知的能動性についてはそれぞれ満点を維持しており、社会的役割については 2～4 点の間で経過し、本年度は 2 点であった。

生活の満足度：10 年前は「なんともいえない」であったが、平成 28 年度以降は「どちらかという満足」と回答している。

介護保険制度利用状況：10 年前より介護度は要支援 1 を維持し、デイサービスを継続して利用している。

B 氏、80 歳女性、ショートステイ利用中

本年度の検診等については、B 氏がショートステイ利用中であったことから、新型コロナウイルス感染症の影響で受入れ施設から外出許可が得られず、家族からのききとり調査のみを実施した。

(1) 歩行：令和 1 年度まで「独歩：やや不安定」だった

が、本年度は「要介助」となった。

(2) 異常知覚の程度：「軽度」で維持している。

(3) 身体的併発症：「心疾患」、「慢性胃炎・便秘」に、平成 28 年度に「白内障」が、令和 1 年度に「パーキンソン病」が加わった。

(4) 精神症候：令和 1 年度まで「なし」で経過していたが、本年度は「あり (抑うつ)」となった。

(5) 診察時の障害度 (令和 1 年度までの情報)：「極めて軽度」で経過していたが、令和 1 年度は「軽度」となった。

(6) ADL 及び介護の状況：

1 日の生活：「時々外出」で経過していたが、令和 1 年度は「家の中をかなり移動」、本年度は「座っていることが多い」となった。

日常生活動作：パーキンソン病発症前まで、日常生活動作は自立 (Barthel インデックス 95 点) を維持していたが、パーキンソン病を発症した令和 1 年度から一部介助が必要な動作が増え (Barthel インデックス 85 点)、本年度は全ての動作に介助が必要な状態 (Barthel インデックス 15 点) となっている。

生活内容：10 年前は手段的自立 3 点、知的能動性 3 点、社会的役割 4 点の計 10 点であり、以降は計 6～8 点で経過していたが、本年度は手段的自立 0 点、知的能動性 2 点、社会的役割 2 点の計 4 点と低下した。

生活の満足度 (令和 1 年度までの情報)：「満足している」、「なんともいえない」、「どちらかという満足」のいずれかで経過し、令和 1 年度は「なんともいえない」であった。

介護保険制度利用状況：令和1年度に初めて介護保険制度を申請し「要介護2」の認定を受けたが、本年度は「要介護5」となり、調査時点ではショートステイ利用中であった。

C氏、71歳女性、在宅療養中

本年度の検診等については、C氏より新型コロナウイルス感染症の心配から往診も含め受診を見合わせたいとの希望があり、ききとり調査のみを実施した。

- (1) 歩行：「独歩：やや不安定」で維持している。
- (2) 異常知覚の程度：「軽度」から「中等度」のいずれかで経過しており、本年度は「中等度」であった。
- (3) 身体的併発症：「高血圧」、「糖尿病」に、平成26年度に「白内障」が、平成29年度に「頸椎症」と「突発性難聴」が、平成30年度に「骨粗鬆症」が加わった。
- (4) 精神症候：ほぼ「なし」で経過していたが、平成29年度以降、「あり（不安・焦燥、心氣的、抑うつ等）」となっている。
- (5) 診察時の障害度（令和1年度までの情報）：「軽度」から「中等度」のいずれかで経過しており、令和1年度は「軽度」であった。
- (6) ADL及び介護の状況等：

1日の生活：「時々外出」で経過している。

日常生活動作：自立（Barthel インデックス 100点）で経過している。

生活内容：10年前は手段的自立5点、知的能動性4点、社会的役割3点の計12点であり、以降は計11～12点で経過していたが、令和1年度は計8点、本年度は手段的自立4点、知的能動性3点、社会的役割2点の計9点となっている。職業については、平成29年度以降「なし」となっている。

生活の満足度：「なんともいえない」から、平成29年度から「どちらかというと不満足」、令和1年度から「まったく不満足」と回答している。

介護保険制度利用状況：介護は必要のない状態を維持しており、利用はない。

D. 考察

本年度の検診対象者3名について、平成22年度から本年度までの10年間の経過を追ったところ、1名は状況を維持しており、2名については身体的・精神的に状況に変化がみられた。

状況を維持しているA氏については、10年間の経過のなかで、身体状況や本人を取り巻く環境には、ほぼ変化がなかったが、状況に変化があった2名のうち、B氏については、日常生活に支障を及ぼす身体的併発症（パーキンソン病）を発症し、発症後は、自立していた日常生活動作に介助が必要な状態となり、これまでほぼなかった精神症候で「抑うつ」が出現した。C氏については、日常生活動作は自立し介護の必要はない状態ではあるが、社会的役割であった「仕事」を退いた翌年度から、身体的併発症の数が増加し、「不安・焦燥、心氣的、抑うつ」といった多くの精神症候が出現し、現在に至っている。

E. 結論

10年間の経過をみると、身体状況や本人を取り巻く環境に大きな変化がなかったA氏は身体的、精神的に変化はなく10年前の状況を維持していたが、B氏は「パーキンソン病の発症」、C氏は「仕事」を退いた後、身体的・精神的に状況が悪化している現況がみられた。身体的併発症の発症はもとより、本人を取り巻く環境の変化により、心身に与える影響を予測し、支援していく必要があると考える。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

なし